

第13回

## わらべうた・民謡 ～日本の音楽（2）～

### 学習のねらい

わらべうたや民謡は、人々の暮らしの中で自然に生まれ、古くから各地域で歌いつがれてきたものです。口伝えで受け継がれる中で、用途や土地柄に合わせ、歌詞や節回しを工夫して歌われました。20世紀以降は、各地の民謡が文字や楽譜・録音によって本格的に記録されるようになります。今回は、わらべうたや民謡のさまざまな姿にふれ、そこから私たちの根っこにある音感覚や音楽的な特徴を考えます。



講師  
塚原 康子

### 地域に伝わる音楽に目を向ける

地域に伝わる3つの歌を紹介します。1曲目は、北海道平取町のアイヌの人々が祭りの際に集団で歌う座り歌《ウポポ》です。

一人が歌い出し、次々にそれを追いかける輪唱になっていて、器の蓋をたたいてリズムをとります。声の重なりが独特です。

2曲目は、宮崎県の椎葉村の《春節》です。山の神さまに春が来たことを知らせる重要な歌で、遠くまで呼びかけるような、伸びやかな歌声です。

3曲目は、長野県の盆踊り歌《木曾節》です。一人が歌いかけ、それに大勢が答える、いわゆる音頭一同形式です。「ナンチャラホイ」「ヨイヨイヨイ」のような囃子詞が多いのも民謡の特徴です。

民謡は、古くは多くがこのように歌だけで、あるいは手拍子などに合わせて歌われたようですが、今日ではほぼ楽器の伴奏が付いています。伴奏に使われる楽器は、三味線や三線、尺八、笛、胡弓、太鼓、鉦などですが、CDなどではオーケストラ伴奏入りのものもあります。



- 鹿児島県奄美の島唄《朝花節》
- 青森県の《津軽じょんから節》
- 富山県の《越中おわら節》

### わらべうた・民謡の音階やリズムを知る

みなさんは、子どものころに唱えごとや、遊び歌を歌った経験はないでしょうか。たとえば

《かごめかごめ》、《ずいずいずっころばし》のようなものです。《かごめかごめ》を聴いてみると、シンプルな音の動きですが、そこには何か決まりがありそうです。

わらべうたを土台に、日本の音楽の音階を考えたのが、民族音楽学者の小泉文夫（こいずみふみお）（1930～1983）です。小泉は、「あーした天気になーれ」のような「隣り合った2つの音からなる旋律では必ず上の音に終わる」とか、「どれにしようかな、神様のいうとおり」のような「連続した3つの音からなる旋律では必ず真ん中の音に終わる」といった法則を見いだしました。そして最終的に、日本の音階を、民謡音階、都節音階、律音階、沖縄音階の4つに分類することを提唱したのです。

また、民謡のリズムと歌詞の当てはめ方に関しても、小泉は2つの対照的なタイプを示しました。1つは、決まった拍がなく歌詞を引き延ばして歌う追分様式、もう1つが拍ののって歌詞をスラスラ歌っていく八木節様式です。

近年、音楽学者の金城厚（かねしろあつ）は、小泉文夫のこの2分類を発展させて、歌のリズム様式の4分類を唱えています。



- 追分様式の《江差追分》
- 八木節様式の《八木節》

## わらべうた・民謡の声の使い方の特徴を考える

民謡は地域によって、曲のタイプによって、歌う人によって、声の使い方には特徴があり、決して一とおりでありません。同じ曲であっても、自分だけで歌うときと、仲間と一緒に声をそろえて歌うとき、またステージでお客さんに向かって歌うときとでは、声の出し方は違って当然です。民謡の中には、その曲が歌われていた仕事や行事自体がすでになくなったものもあります。それでも、民謡の歌詞や旋律には、何かしらその名残が残っているはずですよ。

民謡はもともと歌い手や場が変われば違う風に歌われるものでした。それをふまえると、現代の私たちが自分のもつ自然な声で民謡を歌うことで、見知らぬ時代や地域の暮らしが生んだ情感を追体験する意味は大きいのではないのでしょうか。

### ♪ 今回取り上げる曲 ♪♪♪

- |                        |                 |
|------------------------|-----------------|
| ● ウポポ（北海道平取町 アイヌの人々の歌） | ● 越中おわら節（富山県）   |
| ● 春節（宮崎県椎葉村）           | ● かごめかごめ（わらべうた） |
| ● 木曾節（長野県 盆踊り歌）        | ● 谷茶前節（沖縄県）     |
| ● 朝花節（鹿児島県奄美大島 島唄）     | ● 江差追分          |
| ● 津軽じょんから（じょんがら）節（青森県） | ● 八木節           |